

# 近世後期洒落本から見た敬語の地域差

森 勇 太

## 洒落本による近世後期日本語研究

洒落本は、“延享年間（1744～1748）から文政年間（1818～1830）にかけて、初めは上方、後には江戸を中心に刊行された一種の遊里小説”である。体裁は、“会話文体によって遊里を描”いた（「洒落本」『日本語学研究事典』、明治書院、鈴木丹士郎氏執筆）ものとされる。図1『聖遊郭』では、発話冒頭に▲という話者の注記があり、図2『傾城買二筋道』でも発話冒頭に、話者が四角で囲まれて表示されている。演劇の台本のような体裁で、会話を連ねた形で遊里の様子が描かれている。このような点から洒落本は、近世後期の話し言葉研究において重要な位置づけを占めてきた。

もちろん、遊里のことばがそのまま市井で使われているとするのは早計である。日本語史研究でも、「遊里語」と呼ばれる、遊里特有のことばづかいがあることが知られており、「なんす」や「ありんす」などの敬語形式はその代表

格である。しかし、遊里語は接客で用いられたものであり、著しく失礼な印象を与える言葉遣いを遊女が選択するとも考えにくい。遊里語が方言の矯正として用いられたという指摘もあり、敬語の使い方については、一定程度市井の言語と連続していたと想定されよう。

また、洒落本の重要性として、刊行された地域が多様である点も見逃せない。洒落本は、京都・大坂・尾張・江戸で一定数刊行されている。このような地域的多様性は、近世期の方言差がどのように成立し、現代までに至っているか、という問題を考える有力な手がかりである。

## 敬語の運用の地域差

筆者は、近世期の洒落本における依頼・命令表現に使われている敬語を対象として、京都・大坂・尾張・江戸を対照させる形で調査を進めた。調査の詳細は森（2019）を参照されたいが、ここでは上方（京・大坂）と江戸の対比に注目して、概要のみ述べる。

まず、京都・大坂・江戸の洒落本から、遊女から客へ用いられている依頼・命令表現を抽出した。それらの表現を敬語の有無の観点から以下の3つのグループに分ける。

- ①非敬語形＝尊敬語を用いない形式群。
- ②オ形＝尊敬語オ（のみ）を用いた形式群。
- ③敬語形＝オ以外の尊敬語を用いた形式群。

そして、各地域で①②③の表現がどのくらい見られるかを計量した。話し手と聞き手の関係を固定しているので、①②③の割合に地域差があるとする、各地域の敬語の運用の特徴が現れている可能性がある。

まず、京都・大坂について、①②③それぞれに一定数使用例があり、多様な形式を用いていた。客に対しても（1）のように①非敬語形や、（2）のように②オ形を使うことが特徴的である。

- （1）「いきたいなア。つれてゆき。」（芝居に）行きたいなあ、連れて行け、①非敬

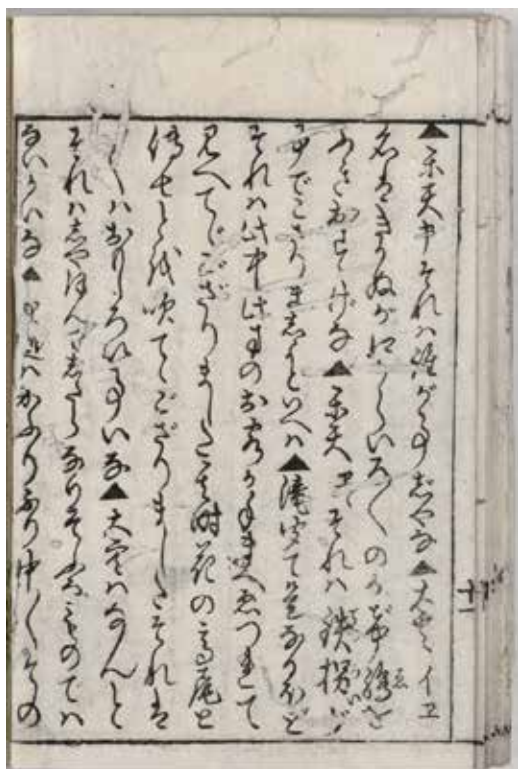


図1 『聖遊郭』（国立国語研究所蔵、11ウ）



図2 『傾城買二筋道』(国立国語研究所蔵、17才)

語形) (風流裸人形、京都)

(2)「ちとすなほにうけておくれいな」(ちょっと素直に(酒を)受けておくれ、②オ形) (風流裸人形、京都)

ところが、江戸はほとんどが(3)のような③敬語形であった。

(3)「ちつとましにもおなんなんし。」(ちょっとましにおなりなさい、③敬語形) (傾城買杓子木、江戸)

江戸では、遊女は客を目上の人物として、目下に対する話しことばとは切り替えて、敬語を固定的に徹底して用いる傾向がある。それに対し、上方は敬語の使用・不使用が流動的で、相手との距離感の調整や発話意図の異なりを、敬語の使用・不使用で表現していると読み取れる。

このことは、丁寧語の使用にも見て取れる。現代語の会話では、目上の人物と話すときには、基本的にすべての文末で丁寧語「です」・「ます」を付す。筆者が近世期の遊女から客への丁寧語の使用を調査したところ、江戸は、特に1800年以降の作品で、文末に徹底して丁寧語を用いる話者が多い。しかし、上方は文末に徹底して丁寧語を用いる話者が少なかった。これ

も敬語の運用について、江戸は固定的、上方は流動的という差異が現れている。

## 地域差の要因

このような地域差は近世期における社会変化から導かれたものであろう。江戸は、近世期に政治・文化の中心となった。江戸はもともと敬語のない地域に、上方の敬語を導入してそれが体系化された。つまり、江戸において敬語とは、共通語として、目上の人物と話すときに、相手に失礼のないように話していることを明示する役割をもつ。従って、依頼・命令表現のほとんどが③敬語形であったり、丁寧語の文末が徹底されたりといった運用が見られることになる。

一方で、京・大坂では、日常語のレベルに敬語があり、敬語によって丁寧さや親しさを示しながら対人距離を良好に保つ。単に待遇的に違反しないことだけでなく、相手を遠ざけすぎず、親しみを示すことも重要なことである。また、近世後期には政治・文化の中心を江戸に譲るなかで、上方のことばが地域語となるが、流動性の少ない地域社会の中で、共通語的な、固定的な敬語使用は必要とされなかったのであろう。この敬語の地域差は、現代の地域差にも連続するものである。

近世期の言語研究自体は多数の蓄積があるが、本稿のように地域差やその成立過程を明らかにしようとした研究は多くない。洒落本資料は、国立国語研究所の「日本語歴史コーパス」にも多数作品が収録され、簡便に調査ができる環境が整いつつある。文学研究・歴史研究と協同して、社会のさまざまな層のことばを映し出すような、新たな展開が期待される。

## 図版出典

図1・図2ともに人間文化研究機構国立国語研究所「日本語史研究資料[国立国語研究所蔵]」  
<https://dglb01.ninjal.ac.jp/ninjaldl/>

## 参考文献

森勇太(2019)「近世後期洒落本に見る行為指示表現の地域差—京・大坂・尾張・江戸の対照—」『日本語の研究』15-2、pp.69-85、日本語学会

関西大学文学部教授